

第 15 回 Tokyo ER meeting 開催レポート

2021年6月19日(土)、第15回Tokyo ER meetingを開催いたしました。約1年半振り且つ初めてのweb開催という事もあり、世話人一同準備から本番、そして終了まで緊張に包まれた雰囲気の中でしたが、参加者の皆様方が視聴方法に遵守していただけた事により、大きな障害もなく盛況の内に閉会まで辿り着く事ができました。会場はキャノンメディカルシステムズ株式会社首都圏支社の一室をお借りし、演者の先生にお集まりいただき配信いたしました。web方式より事前参加登録数に制限を設定しておりましたが、募集開始4日で登録数の上限に達し締め切らせていただきました。今回、参加が叶わなかった皆様には心よりお詫び申し上げます。

技術講演は聖路加国際病院の後藤 綾乃 先生に当直業務のみCT装置を扱う技師へ向けて、検査への取り組み方や不安な心情そして、急性腹症に対する画像所見の捉え方と単純CT検査の重要性をご自身の経験を踏まえ、分かりやすいスライドを元に解説していただきました。特に当直中最も対応に苦慮する婦人科疾患の卵巣茎捻転について、卵巣の同定手順と左右の卵巣を軸にした冠状断作成が診断に大きく寄与する点などは大変参考になりました。後藤先生の発表スキルの高さに危機感を持った同年代の技師さんも少なくなかったかもしれません。

教育講演1はがん研究会有明病院の石山 光富 先生に虫垂炎のCT診断について、基本的な解剖から病気の特徴を含めて検査前確率を意識した画像診断まで解説していただきました。冒頭から最後まで虫垂の同定が最重要ポイントであり、虫垂間膜を理解した炎症評価などを含めた画像所見の積み重ねにより読影は形成されていく事が理解できました。石山先生の「診療放射線技師は病気を知らなければ質の高い画像は提供できない、読影する我々医師も装置の特性を知らなければ正しい画像の評価ができない。その部分の歩み寄りが救急放射線診断の向上に繋がる」という文言は視聴した皆様に響いたのではないかと思います。

教育講演2は昭和大学江東豊洲病院の神谷 雄己 先生より脳梗塞急性期再開通両方の院内連携と画像診断についてご講演頂きました。脳梗塞急性期再開通の遍歴史と共に脳神経内科医としてキャリアを積まれた先生から、40年間生存率があまり変わらない心原性脳梗塞症における時間を意識する事の重要性を解説していただきました。特に発症から6時間以内は「来院から再開通90分」を目標にコードストロークに沿ったチーム全体での様々な取り組みとPenumbra及びcoreの画像診断におけるMRI firstや近年スポットを浴びているVitrea CT 4D-Perfusionの有用性と共に診療放射線技師の役割を説いていただきました。また、コロナ禍における感染防御も意識した所属施設の取り組みを紹介していただき、「このような状況下になったからこそ職種・部署を超えたコミュニケーションを完成する事ができた」というCOVID-19による先の見えない医療現場の中で新たな光を見いだした昭和大学江東豊洲病院の迅速かつ的確な組織体制に感嘆しました。

シンプルなチームアクチベーションを形成するにあたり、SNSの利用や通話端末などを効

果的に使用するという内容は、今後同じような取り組みを目指す参加者には大変参考になる内容でした。

今回初の web 開催にあたり多くの方にご協力を賜り、改めて Tokyo ER meeting というチームの結束力と強さそして優しさを感じました。参加して頂いた皆様そしてご講演を賜りました 3 名の先生方におかれましては、コロナ禍における医療の最前線で患者さんの検査・診療に尽力されている事に、心から敬意を表するとともに、深く感謝を申し上げます。また、残念ながら感染によりお亡くなりになられた方々に謹んでお悔やみを申し上げますとともに、罹患された全ての皆様に対し 1 日も早いご回復をお祈り申し上げます。当会は今後も、救急医療に携わる医療従事者そして多くの患者さんが救命される為、少しでもお役に立てる情報を提供できるよう、世話人一同取り組んでまいります。

次回は未定でございますが、対面式にて開催を希望する一方、多くの方に場所を選ばず参加できる web 方式の良い部分も取り入れ、after コロナにおける新しい Tokyo ER meeting で皆様にお会いできる日を楽しみにしております。



後藤先生（左）と司会・宇内

石山先生（右）



神谷 先生（中央）

閉会後の様子